

更級

37

更級小学校の児童が作ったカルタを、芝原地区にお住まいの市川はつさんが持ってきてくださいました。読み札と絵札がそれぞれあり、ハガキを一回り大きくした紙の箱（写真下右）にきれいに入っています。中には制作の経緯について、子どもたちと先生がつづった文章も添えられていました。

▽明治の偉人

作ったのは平成四年度（一九九二年）に四年二組に在籍した子どもたち。社会科の単元「郷土を開く」で、地域の歴史を調べ、その成果をカルタにしたのだそうです。テーマは江戸時代末から大正時代にかけて、旧更級村の暮らしの改善に貢献した人や事を四つ設定しています。「明治新道」「大正橋」「ため池」「坂田寅治郎」です。

明治新道とは佐良志奈神社（若宮地区）からがけを横目に上山田地区へ千曲川沿いを走る道と、三島地区から冠着山に向かつて羽尾地区にのびる道のことです。前者の道は、それまでは八王子山の万治峠越えでしか両地域を行き来できなかったため、芝原の中村林左衛門さんが発起人となって多くの年から寄付金を集め、明治十一年（一八七八）に開通しました。後者の道は、冠着トンネルを抜く資材の運搬道路としてつくられました。トンネル完成後、用地であった畑を地権者に返す予定でしたが、初代更級村村長の塚田小右衛門さんが村民の生活道路としてそのまま買い上げるのに尽力しました。

子どもを熱くさせた郷土学習

大正橋は、それまでは渡し舟による往来で不便だったので大正三年（一九一四）に木橋としてつくられ、昭和六年（一九三一）にはドイツ人の設計でコンクリート橋に架け替えられました。更級郡と埴科郡をつなぐので二郡橋とも呼ばれました。

ため池は、斜面が多く水利が悪い村内の地区のために

田寅治郎さんは三島地区の生まれで、農産物の収穫量を確実に増やすために、馬耕や陸苗代などの合理的な農法を考案、地域内外に広めた方です。担任の宮坂岩子先生の文章の中に「原版はカラーですが、予算の関係で白黒になりました」というくだりがありました。カラー原版の所在を知りたくて宮坂先生に電話を差し上げたところ、宮坂先生がお持ちだったこと。お訪ねして見せていただきながら、制作の狙いなどについてお話をうかがいました。（宮坂先生は四年前に定年退職なさっています）

▽勝手に動き出す

宮坂先生がカルタを作ることにした背景には、前任の上山田小学校で、長野県考古学会長も務められた故森嶋稔先生と地域の歴史を調べたときの楽しさがあつたそうです。宮坂さんは「お地蔵さん」をテーマに休日には、お子さんと一緒にカメラをぶらさげながら歩き回って調べました。その面白さをかかえて、更級小学校に転任。仙石

あ危ない危ない万治峠多くの人がなくなつた
いい苗が元気で育つ陸苗代
う馬も渡るにやお金がかつた一郡橋
え偉いぞうこいそ林左門明治新道作つたよ
お大雨で流され大変羽尾の水田
か冠着トンネル作るために作つた明治新道
ききよつからは馬で田んぼを耕そう
く工夫して馬よけ三万所明治新道
け研究会坂田寅治郎と二宮金治郎の勉強だ
こ高架橋足の下にはうす池
さ更級のため池土もあるんだよ
ししが岩みんなの交通守るんだ
須坂には今も生きてる寅治郎の教え
せ設計はドイツ人がしたんだ大正橋
そそれはすばらしい坂田式農業経営法
た大洪水二郡橋が流された
ち忠左衛門ついに原池かんせいだ
つ塚田小右衛門明治新道作つと考えた
てこの橋大洪水に負けないぞ
とく農家坂田寅治郎更級の偉人
な中村林左門きよを集めてあるいたぞ
に荷車は乗せられないからかついでこ
ぬめれた大正橋滑ってこつてんぞ
橋からおこちる人も多かつた

博 美津保 美絵 平 論 拓 真 章 修 文 文 諒 小 大 豊 論 伸 沙 亜 智 勇

ねねずみさし神ノ木となり約百年
のほそこのぼてあつたぞため池が堀・純
は花柄池今でも活躍しているよ
ひむろう木に安全ねがった林左門
ふふなる木を払って渡つた千曲川
へ弁天様の湧き水は今でも使われてるよ
ほほの暗き木々がかぶさる仙ヶ原池
ま万治峠万治元年にひらかれた
み皆でお金出さず明治新道買おうじゃないか
む村の人橋を作つて向こうに行きたい
め明治新道つるはして岩をくだいて作つた
も森中左門小さい時は捨五郎
や山の中きれいなため池六つあり
ゆいこんも寄付集めをした林左門
よら中でもゆたんだでない見ればり番
らんぼつに橋をわたるとこわれない
り林左門父の言葉をわすれな
るり色のきれいなため池山の神
れ連続で橋を壊され大洪水
ろ六十九才で天国に行つた農業研究家
わわたし舟十人乗るんだ集まれよ
を神ノ木を知らない人は笑つた
んせんしんの残した宝わすれま

章 純 智 住 純 堀 博 平 布 正 利 鳥 伸 進 英 学 由 豊 芳 慈 亜

更級小学校の歴史カルタ



地区の小松公雄さんのお宅の協力を得て、子どもたちとまず、りんご栽培に取り組みました。五、六人で木を一本借り、農協にも手伝ってもらい出荷販売までやりました。その経験から「更級の人はとても温かく子どもたちに優しい」と感じ、次のクラスを受け持ったとき、地域の力を借りて郷土学習をすることを決めました。

ただ、その段階ではカルタにすることを決めていたわけではありませんでした。

テーマは森嶋さんや郷土史家の塚田哲男さんにお話を聞く中で、地域住民の暮らしの向上に大きく貢献した「交通」と「農業」に絞る、具体的な素材として「明治新道」など四つを調べることにしたそうです。驚いたのは、「子どもたちが勝手に自分で調べていった」ということでした。子ども向けに書かれた資料はあまりありませんから、学校が休みの日にはあらかじめ約束することもなく森嶋さんや塚田さん、さらに中村林左衛門さんのお子孫のお宅などを訪ねました。いきなりの訪問ですから、必ずしも応対できるわけではありません。子どもたちはそれでもめげることなく繰り返し訪ねたそうです。そして運動会が終わった二学期後半、調べたことをどんな形にまとめようかと考えたとき宮坂先生はカルタを提案しました。二冊の文集もいけど、大事な思いはカルタにした方が残るのではと宮坂先生。以前に印刷会社からもらったいた厚手の紙がたくさんあつたので、それを使うことにしました。

そのときに子どもたちがクレヨンで描いたものが左の写真です。一枚の大きさはB5判と大判です。たくさん調べたことを俳句のような五七調にまとめ、それを一枚の絵に描くというのは大変な作業ですが、これら色彩豊かで躍動感のある図柄を見ると、子どもたちが郷土学習に注いだ情熱のほどがうかがえます。（読み札と絵札それぞれに、作者である子どもたちの一字署名が記されています）

▽これが本物の学習

本当はカラー印刷にしたかったのですが、予算がないので白黒にすることにしました。それでも印刷費はかかるので、宮坂さんは地域の人たちに買ってもらって、それを印刷費に当てることを提案。子どもたちはできあがったものを手にして、知り合いの大人だけでなく畑仕事をしている人にも営業活動をしたそうです。カルタの存在を覚えてくださった市川さんは、四年二組のお子さんを持つ知り合いの方から一セツト分けてもらったのだそうです。

宮坂先生はどのくらいの費用がかかって、いくらで売ったのか今はもう覚えていないということです。印刷してもらった紙を裁断したりホチキスで箱にしたりする作業を、PTAの役員さんにも来てもらい子どもたちと一緒にやりました。

完成品を送った森嶋先生から宮坂先生は次のような手紙をいただいたそうです。

「これがほんものの学習です。先生は水先案内人。ただ、知っているだけでもだめです。パワーだけでもだめですね。知らないところから出発する。一緒に出発する。子供達と。だが、行き先を間違つてはいけないと思うのです。素敵な仕事でした。ありがとうございました」

宮坂先生のお話でもう一つ印象に残ったのは、「更級小学校では何をやってても地域の人が協力してくれる」という確信がカルタづくりを支えてくれた」という言葉でした。一九九二年の四年生は当時十歳以来、十四年。既に大人の仲間入りです。

発行 二〇〇六年 六月十一日

編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）



千三八九・〇八一三
長野県千曲市大字若宮一八四・六
（旧更級郡更級村）